

7月・歴史研修会

五條市の歴史を訪ねる II

7月14日(火)参加者27名。梅雨とは思えぬ快晴、予想最高気温は34℃、歴史日和である。朝日に映える葛城山、金剛山の山並みを見ながら、マイクロバスはJR北宇智駅から細い古道を上がり近内町に着いた。万葉集や続日本記に天皇の狩猟場とある。欽明天皇が狩りに来た時の歌がある。

「たまきはる宇智の大野に馬並めて 朝踏ますらむ その草深野」

近内は葛城修験道の道場「金剛山転法輪寺」への登山口でもあり、参詣者で賑わったという。

はるかに台高山脈の高見山、大峰山脈の山上ヶ岳・弥山が遠望できる高原地帯である。

登録有形文化財「藤岡家住宅」は近内の中心にある。江戸時代の豪壮な庄屋屋敷は、壁が落ち、天井には穴、庭は荒れ放題になっていたという。修復時、家具・商売道具・生活用具などの骨董品や貨幣が無数に発見され、各分野の専門研究者の調査によって、その貴重さが証明された。そのお宝が所狭しと陳列されている。各部屋には珍しい着生植物「風蘭」が飾られ、芳香を放っている。

三代前の当主藤岡長和(俳号玉骨)は内務官僚・知事時代を通じて正岡子規や高浜虚子など文人や政・財・学界の著名人とも広い交友があった。多くの手紙も発見され展示されている。丁度粘菌研究者「南方熊楠からの手紙展」が開催されていた。

玉骨が自宅で詠んだ句がある。

「蔵の前 涼しきことを 猫知れり」(内蔵にて)玉骨という俳号は、うちの館の開館記念誌では中庭の老梅にちなんで自らつけたという。のちに鉄幹から陳腐だとして、蒼厓の雅号をもらったが、気に入らず使わなかったとある。

管理・運営する「うちの館」川村館長から「古事記に記されている五條」について講義があった。川村さんは学芸員で日本児童文芸会会員。タイの民話を翻訳して日本に紹介したり、絵本その他の著作も多い。藤岡家で発見された、現存する古事記の写本で最も古いといわれる国宝「真福寺本古事記」(真福寺蔵)の上・中・下巻3冊の復刻本

(昭和18年立命館大による復刻)の解明をしておられる。

上巻(瓊瓊杵)木花之佐久夜毘売と阿陀比売神社(昭和18年立命館大により複製)の研究をされている。

大広間で昼食の後、午後川村さんのガイドで阿田を訪れる。阿田は神武天皇が熊野より八咫鳥に導かれて、大和の国で最初に足を踏み入れた土地、「吉野河の河尻」とされる。

阿陀比売神社は江戸初期の建築で、創立は崇神天皇15年に遡る。祭神は瓊瓊杵尊と結婚した「木花佐久夜毘売」と御子たち4柱。古来より安産の神として信仰されてきた。近くに御子を生むときに産屋に火をかけた比売火懸の森がある。

吉野川沿いに下り、大和と紀伊の県境の辺りは

丘陵地で万葉の名所「真土山」である。金剛山から発し紀ノ



川にそそぐ落合川が両県の境界となっている。万葉時代の街道はこの川を横切っていて、飛び越えられる箇所が「飛び越え石」と名付けられた。

60cm程の幅だが、おっかなびっくり全員無事飛び越えることができた。この辺りを詠んだ万葉歌は8首あり碑が建っている。そのうちの一首

「白栲の にほふ真土の 山川に 我が馬なづむ 家恋ふらしも」

この地が万葉人に多く詠まれたのは帝都・大和から旅立つ「国境」であったからとか。地元では「神代の渡り場」とも呼ばれていた。弘法大師がここを通過して高野山へ向かうとき、腫瘍で乳が出ない女人に霊薬を調法してたちまち治したという大師伝説がある。かつて「待乳膏薬」として、真土峠(別名 待乳峠)の茶屋で売っていたらしい。

川村さんを藤岡家住宅までお送りして帰途についた。(中井 弘)